

【天気予報】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。三島地区における10月の過去の気象データは以下の通りです。

	平均気温(℃)	最高気温(℃)	最低気温(℃)	降水量(mm)
2015年	17.6	22.9	12.9	16.0
2016年	19.6	23.6	16.4	72.5
2017年	17.7	21.1	14.6	530.0
1981～2010年	18.2	22.2	14.7	115.5

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 落水

落水時期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌漑で土壌水分を保って下さい。落水が早いと、登熟不良となって品質低下を招くとともに、稈が弱まり倒伏しやすくなります。

2 収穫

刈取り時期は、早過ぎると未熟米や青米が多くなり収量が少なくなります。また、遅過ぎると茶米や胴割粒が発生するとともに、食味や品質が低下するため、下表の収穫適期基準を参考に適期刈取りして下さい。

【品種別収穫適期基準】

区分	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井
出穂後積算温度(℃)	900～1,100	1,000～1,150	1,050～1,200
最長稈黄変率(%)	85	85～90	85～90
出穂後日数(日)	40～46	42～48	42～50

3 乾燥

収穫後は速やかに乾燥機に張り込み、乾燥を始めて下さい。乾燥速度は1時間当たり0.8%以内とし、胴割れや乾燥むらを防ぐために急激な乾燥はしないで下さい。過乾燥は品質や食味が低下するので、仕上げ水分は14.5～15.0%が目標です。

4 調製

事前に籾摺り機の点検や部品(ゴムローラ等)交換や調製を行い、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生を防止して下さい。

調製はライスグレーダーを使用し、整粒歩合80%以上を目標にして下さい。ふるい目は、1.85mm以上を使用して、未熟粒を除去し、上位等級に仕上げして下さい。

<松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 庭先選別

昨年度、10月中旬から10日連続の降雨(371mm)や月末には2日間で120mmを超える降雨があり、軟腐病や乾腐病での腐敗芋が多く見られました。

芋に湿り気があるとカビや腐りの原因となります。圃場の排水を図るとともに収穫後は表面やかぎ口の泥を落とし、乾かした状態で出荷して下さい。

分割や根取りをする際に、芽つぶれ芋や割れている芋等の規格外品、また、かぎ口が赤い芋や腐敗芋が混入しないように、庭先選別を徹底し、計画的に出荷して下さい。

(2) 残さ処理

出荷調整したときに出るクズ芋等の残さを圃場に放置しないで、速やかにロータリーで粉碎し、春までに分解させましょう。

2 やまのいも

茎葉が完全に黄化するまでは、土壌が過度に乾燥しないように水管理して下さい。茎葉が黄化した後は、排水対策に努めて下さい。

3 そらまめ

(1) 高品質安定生産のポイント

①土づくり ②高うね栽培(排水対策) ③適期播種(10月7日～15日頃) ④誘引の徹底 です。

(2) ポット育苗

種子は10a当たり80程度準備し、「おはぐろ部分」を斜め下にして、種子の尻部がわずかに見える程度に1粒ずつ土に差込みます。害虫防除のため不織布等で被覆して下さい。

(3) 施肥・定植

土づくりとしては、堆肥3,000kg/10a、苦土石灰100kg/10a、基肥として定植の1週間前よりりん20kg/10a、菌根甘60kg/10aを施用し、マルチ張りは土壌に湿り気のある状態でを行います。

定植苗は、本葉2枚半程度の若苗(播種後2週間程度)とし、深植えにならないよう注意して下さい。栽植密度は、畝幅140～150cm×株間40～45cmです。アブラムシ防除のため、植穴にアドマイヤー1粒剤を1株当たり2g施用します。

<渡邊>

【果樹】

1 温州みかん

(1) 腐敗防止対策

本年産は、夏季の高温乾燥の影響で果皮の質が弱く、今後の降雨や気温によっては浮皮果が発生し、出荷後に腐敗果の発生が多くなる可能性があります。収穫前の腐敗防止剤(トップジンM水和剤2,000倍、収穫前日まで、5回以内)の散布を徹底して下さい。

収穫は、果実品質のバラツキを避けるために着色が早い樹冠外周、上部から分割採取し、果実を丁寧に扱って、腐敗果の発生・混入を防いで下さい。

(2) 樹勢回復

樹勢を回復させ、耐寒性の向上と翌春の花芽分化を促すために、収穫期前後の秋肥の施肥と収穫後の液肥葉面散布を行います。また、降雨がなく土壌乾燥する場合は灌水に努めて下さい。

2 中晩柑類

(1) 甘平、紅まどんな

甘平は、裂果の発生が落ち着く10月上中旬に、最終着果量12～13個/m²に調整します。品質向上のために灌水量を徐々に減らし、収穫までは土壌乾燥が続く場合は、少量灌水を行います。

紅まどんなは果皮障害発生を抑制するために、簡易屋根掛け栽培は10月上旬に天井ビニールを被覆、露地栽培は着色が進んだ頃(8分着色以降)に果実の袋掛け、または専用資材を用いて樹体被覆を行って下さい。収穫まで土壌乾燥を促し、適度な水分ストレスを与えることで糖度の蓄積を促します。

(2) その他の中晩柑

内なり、裾なりの見落とし果実、果梗枝が太く粗皮で品質が劣る大玉果、小玉果、キズ果等を落とし、正品率の向上を図ります。

収穫までは、降雨がなく土壌乾燥が続く場合は灌水を行います。

(3) その他

カメムシの発生に十分注意し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を行って下さい。また、かいよう病に罹病した夏秋梢や果実は除去し、必ず園外に持ち出して処理して下さい。

<可部>

【花き・花木】

1 球根養成栽培

アネモネ、ランキユラスとともに、播種適温は10～15℃で10月中旬以降が適期となります。20℃以上では発芽不良となるので早播きは避けて下さい。

○アネモネ

(1) 播種

播種量は1kg/10aを目安とし、乾いた土で種をほぐし均一に播種します。堆肥等で種が隠れる程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

(2) 除草

播種後10～12日後に除草剤を散布します。

○ランキユラス

(1) 播種

播種量は7～10g/100m²、堆肥等で種子が見える程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

(2) 敷きワラと灌水

不織布やワラなどで被覆し、乾燥を防止し随時灌水します。2～3週間後、発芽し始めたら徐々に被覆資材を取り除きます。

2 シキミ

害虫の発生が見られたら、トレボン乳剤2,000倍を散布します。輪紋葉枯れ病が見られる圃場では、トップジンM水和剤1,000倍を散布します。病害を予防するために、下枝を伐採し、樹間を広く取り、通気性を良くして過湿を避けます。

3 ピットスポラムの生産振興

ピットスポラムは常緑低木で、光沢のある波打った葉がアレンジに用いられます。切り枝をJAうまを通じて出荷しています。

10月は挿し木の適期です。生産・販売に関心のある方はJAうま営農経済部 妻島または農業指導班 日野まで連絡して下さい。

<日野>

【畜産】

1 飼料の増給

猛暑が終わり、一転して朝方の最低気温が平年で17℃を切るようになり、下旬には平均12.7℃に冷え込んできます。家畜は飼料をこれまで以上に採食しますので、それに合わせた飼養管理が必要になります。

飼料が不足し栄養状態が悪くなると、母牛や母豚は発情の発現が微弱になり、また発情再帰も遅れる場合があります。牛・豚ともに種付けを1回逃すと次の発情まで3週間は余計な経費(餌代等)や手間がかかり、母体のコンディションも前より少し難しくなることが多々あります。分娩前後から初回種付けにかけては特に栄養の充足率を切らさないように飼料摂取量に気を付け、発情徴候を見逃さないようにしっかり観察を行って下さい。

2 冷たい夜風の対策

夏場は舎内の換気・通風に重点を置いておりましたが、これからの季節は鶏の雛や子豚、子牛が冷たい夜風に当たる影響で下痢や呼吸器病を発生しやすくなります。

舎内に吹き込む風向き等を考慮しながら朝晩の防風設備の操作を行って下さい。

<二神>